

伊藤利之・他（編）

新版 日常生活活動（ADL）—評価と支援の実際

佐伯 寛（産業医科大学リハビリテーション医学講座）

ADL はリハビリテーションの中核概念であり、ADL の位置づけや方向性は、その時代のリハビリテーションの思想を反映しているといってもよい。本書は、わが国に導入された ADL の概念の混乱を整理し、その評価法の基準化を試みるために、故・土屋弘吉、今田 拓、大川嗣雄の諸先生方が中心となり、1978 年、わが国における ADL に関する最初の単行本として刊行された。また、教科書や参考書として、あるいは、臨床のマニュアルとして幅広く使用され、時代の変遷に合わせて第 2 版、第 3 版と版を重ねてきた。ADL の視点から、この間のリハビリテーションの歴史を映し出していると言っても過言ではないであろう。

第 3 版の改訂以降の 18 年間にリハビリテーションを取り巻く状況は大きく変った。国際障害分類（ICIDH）から国際生活機能分類（ICF）への障害枠組みの転換、介護保険法、障害者自立支援法、バリアフリー法などの法制度の整備、コンピューター技術やハイテク機器の福祉機器への導入などである。ADL 評価も 10 年ほど前は Barthel Index が主流であったが、現在は FIM がその中心となっており、評価項目の難易度による解析など、より高度な分析が加えられるようになってきた。障害者の ADL への対応も大きな変化を要求されている今日、第 3 版以

降の新たな知見を加味した本書が「新版」として刊行されることは願ってもないことである。

本書は、サブタイトルが「評価と支援の実際」となっているように、ADL の指導書である。前半が ADL の概念や評価、自助具や支援機器などの総論的内容であり、後半が障害別の ADL 訓練についての各論的内容からなる。各論の最後に付章として、今回、在宅障害者と高次脳機能障害の ADL アプローチが加えられた。また、家電製品、住環境や福祉機器の進歩への対応に関しても、写真を加えてより実務に直結する内容になっている。

周知のごとく、ADL 指導・訓練には、障害の個性を反映して障害者ごとに大きなバリエーションがあるが、その基本を知らなければバリエーションは広がらない。本書は ADL に関するテキストとして用いられる関係から、障害別訓練法・指導法に関しては基本的かつ代表的なアプローチ（ミニマムエッセンス）にとどまっている。しかし、これほど ADL のミニマムエッセンスをとりまとめた書籍は他にない。この制約が、一方では本書の最大の利点にもなっており、ADL の基本をマスターするための第一選択の書籍となっている所以でもあろう。

（A4 判変 360 頁 定価 6,800 円＋税 医歯薬出版刊 2010）